

P-269 気管支カルチノイド切除例の検討

鶴岡市立荘内病院胸部外科

○正岡俊明, 石原 良

気管支カルチノイドは低悪性度腫瘍で、近年、定型例については縮小手術の適応が議論されている。当科の気管支カルチノイド切除例について検討を行った。

【対象】1983年以降、現在までの気管支カルチノイド切除7例(原発性肺癌切除例中2%)を対象とした。

【結果】平均年齢54歳(37~67歳)。男性2例, 女性5例。発見動機は検診6例, 巨大ブラス術中発見1例。検診発見例のうち術前にカルチノイドと診断されたのは3例で全例葉切+LN郭清を行った。他3例は未確診肺腫瘍としてまず肺組織温存術式にて切除したが、術中迅速病理にてカルチノイドと診断されたため葉切(管状切1例)+LN郭清に変更した。巨大ブラス術中発見例は当初の縫縮術の予定を葉切に変更した。発生部位は肺門型4例, 肺野型3例。組織型は定型6例, 非定型1例。T因子はT₁4例, T₂3例で平均腫瘍径3.5cm。N因子はN₀5例, N₁1例, N₂1例でN₍₊₎例はいずれも定型例で肺門型, T₂例であった。病理病期はIA期4例, IB期1例, IIB期1例, IIIA期1例。予後は定型は全6例が非再発生存中(183~12ヵ月, 平均87ヵ月)でN₍₊₎の2例は183ヵ月・159ヵ月生存中であった。非定型1例は16ヵ月後全身転移で死亡した。

【結語】定型例でもLN転移例を認め葉切+LN郭清にて長期生存が得られており、定型例に対する縮小手術の適応は慎重に検討すべきと思われる。

P-271 頸部気管原発腺様嚢胞癌に対する外科治療の1例

国立長崎中央病院 外科¹, 内科²

長崎大学医学部第1外科³

○辻 博治¹, 木下明敏², 綾部公懿³

気管原発腺様嚢胞癌は発見時すでに高度の気管狭窄を呈していることが多く、長軸方向へ気管粘膜下を広く進展している症例が報告されている。今回、気管をほぼ閉塞する腫瘍に対しレーザーで焼灼し、気道開大を得るとともに病変の広がりを内視鏡的に評価後、根治術可能と判断し外科治療を選択したが、切除後口側端に腫瘍遺残を認めた。根治性に問題が残るものの、発声機能維持のため喉頭を温存し、QOLを考慮した本術式は選択される1つと考えられる。

症例は53歳, 男性。1996年10月頃より、咽頭部違和感、乾性咳嗽を自覚するようになったが放置していた。1997年4月頃より血痰の出現、呼吸困難感を自覚、血痰の持続と呼吸困難感の増強を主訴として11月に近医を受診し気管腫瘍を指摘された。11月7日当院内科を受診し、同日気管支鏡を施行し、声門下約2cmの部位に、気管左前壁よりポリープ状に隆起した腫瘍を認めた。腫瘍は気管膜様部にわずかな間隙を残し、ほぼ完全閉塞を呈していた。生検にて腺様嚢胞癌の診断を得た。気道開大目的でNd-YAGレーザー(非接触型)にて腫瘍を焼灼した。気管支鏡type 200が通過可能な気道開大を得て外科治療目的で外科入院となった。手術は頸部襟状切開、胸骨縦切開で頸部気管6軟骨輪(第1~6)、甲状腺左葉合併切除を施行し、端々吻合にて気管再建を施行した。術後10日間、前屈位の頸部固定を行った。術後の病理診断にて口側端に腫瘍遺残を認めたため放射線治療を施行し(60 Gy)、術後83日目退院となった。

P-270 当院における低悪性度肺癌手術症例の検討

中通総合病院呼吸器外科

○佐澤由郎, 川村光夫, 河合秀樹

当院における'98年4月までの原発性肺癌手術症例は476例であった。このうち低悪性度の肺癌は11例で、カルチノイドの7例と粘表皮癌の4例があった。これら11例について臨床病理的に検討を加えた。

カルチノイドの7例は、年令24~66歳、男4、女3で、中枢型5例、末梢型2例であった。臨床病期は縦隔リンパ節に転移を認めたIIIa期症例が1例、#13uリンパ節転移を認めたIIa期症例が1例で他5例はI期症例であった。リンパ節転移陽性例では放射線治療を追加した。全例無再発生存中で4例が5年以上生存中である。

粘表皮癌の4例は15歳と34歳男性、35歳と51歳女性で、臨床病期はI期3例、II期1例で5回の手術が行われ、術式は肺葉切除1例、二葉切除2例、葉切除1例、残肺全剝1例であった。再発例は1例で、'87年7/27.右肺腺癌の診断にて中下葉切除を施行した。'88年10月.右上葉再発にて残肺全摘施行。'89年3月右Virchow リンパ節転移を生じ34Gy照射した。'93.9月、'94.9月、気管内転移にてNd-YAG laser治療施行。'94.6月20.気管内再発巣の生検より粘表皮癌と病理診断が訂正された。'98.1/22.呼吸困難にて来院。気管支鏡にて左上幹入口部を閉塞する再発巣あり。Nd-YAG laserにて焼灼するも一部しか開通せず。在宅酸素療法を導入し、現在術後10年担癌生存中である。

【結語】低悪性度肺癌では、再発例でも積極的な治療により長期生存の得られる例がある。

P-272

肺癌切除によってサルコイドーシスと判明した一例

名古屋大学医学部胸部外科

竹内美佳, 今泉宗久, 森 正一, 竹内誠次郎, 吉岡 洋

はじめに; 肺癌とサルコイドーシスの合併した比較的稀な症例を経験したので報告する。

症例; 60歳、男性。1997年4月検診にて胸部異常影を指摘され当科受診。精査の結果肺炎の疑いで外来経過観察をしていた。1998年1月6日腫瘍影が拡大してきたためCTガイド下肺生検を施行したところ肺癌との診断を得た。縦隔リンパ節の腫大も認め臨床病期IIIA期(c-T1N2M0)の診断で同年2月16日左上葉切除縦隔リンパ節郭清を施行した。病理組織では縦隔リンパ節に転移はなく類上皮細胞性肉芽腫が認められ、サルコイドーシスが疑われた。また顔面腫瘍を認めていたため術後に生検したところ皮膚サルコイドであり、臨床的にもサルコイドーシスと診断された。

まとめ; サルコイドーシスでは縦隔、肺門リンパ節の腫大を認めることが多く、肺癌においてその画像上進行肺癌と診断されがちである。この経験を踏まえて肺癌の病期診断には、縦隔鏡等の縦隔リンパ節の組織診断が必要であり、サルコイドーシスを合併した肺癌は積極的に手術を施行すべきである。